Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-10-09

正岡子規の病床日誌ー県立神戸病院における子規の闘病記録ー

寺島，俊雄

(Citation)
神戸 街角の解剖学:78-88

(Issue Date)
2016-06-15

(Resource Type)
book part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483082

15

第 15 章

正岡子規の病床日誌
ー県立神戸病院における子規の闘病記録ー

神戸大学大学院医学研究科　神経発生学分野　寺島　俊雄

日清戦争の末期、正岡子規は日本新聞の従軍記者として中国に渡る。子規が中国に着いた当時は、戦況は日本側に圧倒的に有利で、既に講和条約が水面下で行われていた。だから子規は中国で 1 発の砲声すら聞くことはなかった。子規は従軍記者として何ら手柄を挙げることなく、明治 28 年 5 月 14 日、大連湾で佐渡国丸に乗船し、空しく帰国の途に就く。5 月 17 日、佐渡国丸の甲板で子規は喀血する。結核菌が深く子規の体内を蝕んでいたのである。体調の悪い子規に追い打ちをかけるように、船内にコレラによる死亡者が発生する。乗客は馬関（下関）での下船を許されず、佐渡国丸は検疫所がある兵庫の和田岬に向かう。そして 5 月 23 日午前、下船を許された乗客は和田岬検疫所で検疫を受け、同日の午後やっと解放される。自由になった子規は、旧藩主の久松家から拝領した大刀を杖代わりにして検疫所から出てきたものの、衰弱のあまり歩くことはおろか人力車に乗る体力すら残っていない。釣台（担架）に乗せられた子規は、灯ともし頃に県立神戸病院に入院する。担架の手配や入院の手続きなどは、すべて同行した従軍記者仲間が斡旋してくれた。子規は、同行した記者仲間に対して生涯この恩義を忘れないと書いている[1]。

子規が入院した県立神戸病院の病室の天井は高く、ベッドは清潔だった。長い間、狭く不潔な船室に閉じ込められていた子規は、うれしさの余り「死んでも良い」と思う。実際のところ子規はいつ死んでもおかしくなかった。ところが副院長の江馬賤男医学士と若い村井・泉医師の治療により、また弟子の高浜虚子と河東碧梧桐（秉五郎）等による手厚い看護を得て、死線を彷徨っていた子規は奇跡的に回生し、2 か月後の 7 月 23 日に退院し須磨保養院で養生する[2]。子規の入院中、子規を看病した高浜虚子他は、「病床日誌」を書き残した[3]。この病床日誌は主に高浜虚子が書いているが、その一部は河東碧梧桐や叔父の大原恒徳氏が書いているし、この病床日誌の存在に気付いた子規自身が赤字で書き加えた部分もある。病床日誌の著者を虚子「他」とことわる所以である。この病床日誌の自筆稿は国立国会図書館に所蔵されているが、国会図書館デジタル化資料に（正岡子規）病床日誌（1）として公開されており、ネット上で閲覧することもダウンロードすることもできる（図 1）[4]。

子規が下山手通八丁目にあった県立神戸病院（後の神戸大学医学部附属病院）に入院していた事実は司馬遼太郎の長編歴史小説「坂の上の雲」により良く知られているが、その入院生活の実際は子規自身による随筆「病」や「くだもの」、虚子の随筆「子規居士と余」などを通じて断片的にしか知られていない。私は、勤務先近くの神戸市立中央図書館から講談社版の子規全集第 14 巻を借りて「病床日誌」読んだ。この講談社版「病床日誌」には豊富な補注が付されているので子規の病態や看病の体制が良くわかるが、なにしろ文語体なので読み難い。そこでできるだけ原文の調子を残しつつ病床日誌の現代語訳を試みた。またどうしても合点できない箇所については、国会図書館デジタル化資料集で得た自筆稿の画像と比較して検討した。また新たに補注を加えた。

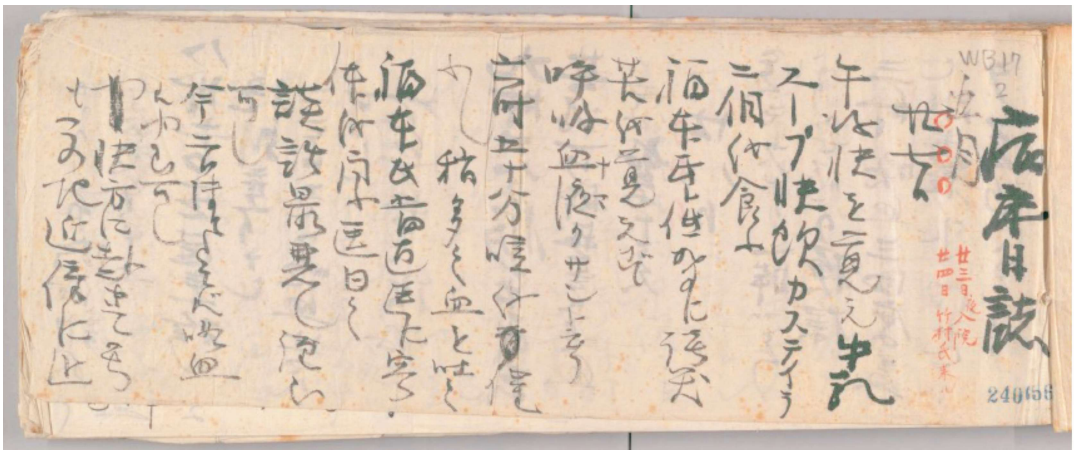

図 1　正岡子規の病床日誌。「五月廿七日　午後快を覚え牛乳スープ快飲カステイラ二個を食ふ。」で始まる。赤字で「廿三日夜入院　廿四日　竹村氏来ル」とあるのは子規自身により加筆された部分である。（出典：文献 4）

高浜虚子他「（子規の）病床日誌」（現代語訳）

五月二十三日　夜入院[1),2)]

1）正岡子規は明治28年5月23日、和田岬の検疫所から県立神戸病院まで釣台で搬送され、即刻入院する。神戸病院に到着した時は夕闇がせまる「灯ともし頃」であった。子規の「病」によれば、子規の病室は二階の二等室であるが、病室番号はわからない。神戸病院入院中の子規宛ての手紙を調べてみたところと、明治28年7月2日付の内藤鳴雪の手紙（封書）の宛先住所が「神戸市県立神戸病院二等十六室正岡子規様」とあることより、十六号室であることがわかる（文献5のpp. 445参照）。また松山在住の下村純孝（牛伴）の7月16日付の封書に、やはり、「神戸県立病院病室第16号　正岡常規様」とあることより、子規の病室番号が第16号室であることは間違いない（文献5のpp. 299）。なお子規が差し出した手紙の住所は、多くは神戸病院とだけあり、病室番号はわからない。

　この二階の二等16号室が神戸病院のどの位置かわからないが、病床日誌の7月5日の項に子規は30間（54メートル）ほど隔てた玄関上の病室に移ること、また窓が南向きであったことから、玄関から東あるいは西に54メートルほど離れた二階の病室であったのだろう。当時の病院の図が得られれば解明できると思う。

2）子規は7月4日に「病床日誌」の存在に気付く。虚子による病床日誌は5月27日に始まるが、子規は「五月廿三日夜入院、五月廿四日竹村氏来ル」と朱書する。以下、赤字の部分は子規が書き足した部分である。

五月二十四日　竹村氏[1)]来る

1）竹村氏とは子規の竹馬の友の竹村鍛。慶応元年11月22日生まれ。河東碧梧桐（かわひがし-へきごとう）の兄で愛媛県出身。俳号は黄塔。当時竹村鍛は兵庫県尋常師範学校（後の神戸大学教育学部で現在の発達科学部）の教員であったことが明治28年の兵庫県職員録で確かめられる（図2）。その後、黄塔は師範学校を辞めて上京し、三省堂と並び辞書で有名な出版社「冨山房」に入社する。黄塔は最上の字（辞）書作成を夢見ていたのである。しかし意に反して冨山房では教科書作りに追われて字書作成の夢が果たせず、ここも退社して明治33年女子高等師範学校（現お茶の水女子大）教授となる。明治34年2月1日、黄塔は子規よりも先に結核で世を去る（37歳）。黄塔の死を哀惜して、子規は墨汁一滴に以下のような痛切極まりない文章を残している。

　我国語の字書は『言海』の著述以後やうやうに進みつつあれどもなほ完全ならざるはいふに及ばず。我友竹村黄塔（鍛）は常に眼をここに注ぎ一生の事業として完全なる一大字書を作らんとは彼が唯一の望にてありき。その字書は普通の国語の外に各専門語を網羅しかつ各語の歴史即ちその起原及び意義の変遷をも記さんとする者なり。されど資力なくしてはこの種の大事業を成就し得ざるを以て彼は字書編纂の約束を以て一時書肆冨山房に入りしかど教科書の事務に忙殺せられて志を遂ぐる能はず。終にここを捨てて女子高等師範学校の教官となりしは昨年春の事なりけん。尋で九月始めて肺患に罹り後赤十字社病院に入り療養を尽し効もなく今年二月一日に亡き人の数には入りたりとぞ。社会のために好字書の成らざりしを悲しまんか。我二十年の交一朝にして絶えたるを悲しまんか。はた我に先だつて彼の逝きたるは彼も我も世の人もつゆ思ひまうけざりしをや。

　我旧師河東静渓先生に五子あり。黄塔はその第三子なり。出でて竹村氏を嗣ぐ。第四子は可全。第五子は碧梧桐。黄塔三子あり皆幼。（二月七日）（正岡子規「墨汁一滴」岩波文庫所収）

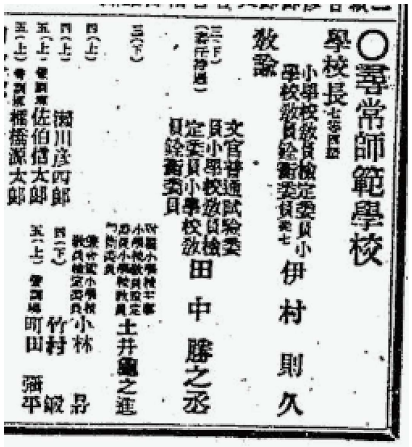
○尋常師範學校
學校長
小學校教員檢定委員小學校教員銓衡委員兼七　伊村則久
教諭
文官普通試驗委員小學校教員檢定委員小學校教員銓衡委員　田中勝之丞
樹川彦四郎
佐伯信太郎
竹村鍛
小林昂
土井龜之進
町田彌平
稲橋潔太郎

図2　明治28年当時の尋常師範学校の職員録。竹村鍛の名前がある。

五月二十七日

午後体調は良く牛乳とスープを快飲し、カステラ二個を食べる。福本氏[1)]と低声にて談笑する。苦痛はない。患者は呼吸が血液臭いと云う。六時五十分咳を催し、やや多く血を吐く。福本氏は当直医に子規の容体を問うたところ、医師は、「会話は最も体に障るから、謹まなければならない。二日ほどたてば喀血は止む。快方に赴いた後もこの地の近傍に止まり、市内を離れて養生するのが良いだろう。」と答える。

　八時当直医の来診。「格別変りない。二三日すれば喀血は止まる。喀血の量はやや減ったようだ。」と云う。九時十分福本氏去る。その後、かなりの間、無言が続く。喀血の頻度は乏しい。

1）福本日南　日本新聞社副社長格。当時子規は新聞「日本」の記者であった。

五月二十八日

咳も少なく一時ごろより安眠の模様。三時に喀血三四度。思うに氷嚢の水を代えることを怠たったためだろう。滋養浣腸[1)]を行うべきだろう。

一　江間（馬の誤り）医学士[2)]曰く、「病巣は昨日以来、徐々に広がっているが、滋養物を食べないため体力が弱っているからである。万一のことがないともいえないので、東京の家族を郵便で呼びよせなさい。いや、最近汽車時間が変更しているから、電報で呼び寄せた方がよいだろう。念のため申し添えるが、家族の呼寄せについては患者へ上手に伝えて、患者の神経に障らないように注意しなさい。」と。江間医師の注意に従い、即刻、母子（妹の誤り）を呼び寄せる電報を陸氏[2)]宛に出した。午後は平穏。眠りがちで咳は殆どなし。朝以来、喀血は三度ずつ二回のみ。午後になると痰にごく少量の血が交じる。午ごろ滋養浣腸を行ったところ具合が良くなった。

　午後は平穏であったが四時ごろ橙一袋を買い求め、これを患者に与えた。さらに散薬（粉薬）一袋を飲みさらに橙一袋を食べたところ、その為だろうか咳が出て血を吐く。咳と同時に橙を吐きだす。たぶん薬も一緒に出たと思う。その後、直ちに容態はおさまる。この後、咳をするたび腹が痙攣して痛いと云う。別に体温も上昇せず、苦しむ様子もないが、咳をする度に左肺の或部分よりさらに左よりの横腹が痛むと云って自らこれをおさえて甚だ苦しむ。

　当直医の回診。曰く、「今夜、主治医から二度目の滋養浣腸の指示が出ているが、患者は腹がはるというので滋養浣腸は明朝にするとして、今夜は排便のための浣腸にす

○神戸病院
院長（月一五〇）　高橋　盛寧
副院長（月一四〇）　江馬　賤男
幹事（月三〇）　南澤　督治
醫員（月四〇）　山口　寛慶
（月三五）　泉　虎雄
（月三五）　浅岡　正康
（月三五）　二見鉄五郎
（月一五）　笠原春之助
（月一五）　田宮雅一郎
（月一二）　宮崎　武治
（月一二）　三橋　久誠
藥局長（月二五）　堀　俊三郎
（月一二）　渉多野　章
藥劑員（月八）　鑑川　忠大
（月六）　廣瀬　拾敏
（月七）　能登　定吉
（月六）　中山　行二

図3　明治28年当時の県立神戸病院の職員録。江馬賤男、泉虎雄の名前がある。

る。」と。患者は寐たままではどうしても便でないから、何度も起きて「おかわ（便器）」にしたいという。（絶対安静のため）私たちこれを何としても止めたが、子規は聞かない。そこで看護婦に頼んで医師におかわの使用の可否を問うたところ、医師もおかわの使用を拒否する。患者はそれでもおかわの使用にこだわり、あげくに癇癪を起こしてしまった。あまり怒らせるのも体に障るので思い直し、細心の注意を払って少しばかり身体を持ち上げ、背中の後ろに布団を置いてこれにもたれさせ、丈の低いおかわを臀部にあてがった。苦もなく咳も別段に激しくなることはなかったが、おかわを用いてもやはり便通はない。ともかく患者自身はこれで納得して、再び体を横たえて安静にした。その後、容態がどうなるかと心配したが、特に異変もなく安心した。しかし、結局のところ浣腸の効果は無かった。いつものように時々咳を発し、その後一度喀血があった。患者は安眠できなかったが、まずは平穏に夜明けを迎えることができた。

1）滋養浣腸とは栄養分を肛門から注入し、直腸壁や大腸壁から栄養分を吸収させる治療法。現在では点滴による栄養分の補充が普通で、滋養浣腸が行われることは殆どない。

2）江間は江馬の誤り。江馬賤男（1862～1923）は東京大学医学部明治20年卒。子規入院当時の県立神戸病院副院長（図3）。後に病院長になるが、神戸病院の移転の際に県側と意見を異にして退職する。神戸病院の近くに内科医院を開業する。県立神戸病院が現在地の楠町に移転するとその跡地を買い取り移転する。江馬医院は盛業を極めたが、昭和10年頃廃業。医院前の急坂を土地の人は江馬坂と呼んだ。

3）陸氏とは陸羯南のこと。明治期の有名なジャーナリストで国民主義者。日本新聞の社長。正岡子規を新聞「日本」の記者に雇用し、物心ともに子規をを援助した。当時、子規とその家族（母と妹）は羯南の家の隣に住んでいた（下谷区上根岸町八十二番地）。

五月二十八日　五時ごろ、二・三度血痰が出る。その後、時々少々痰に交る血を見る。さらにその後、三度ほど喀血。患者曰く、喀血の後は心臓の鼓動が甚だしいと。七時前、牛乳一瓶飲む。七時二十分眠っている様子。八時前に目覚めてコップに半分ほど喀血する。非常に苦しむ。医師の来診。咳止め薬が処方され、八時二十分、頓服する。その後、つぎつぎに三回頓服。福本氏、汽車を（神戸駅で）待つ間、（駅から病院が）近いので、再び見舞いに来る。竹村氏に電報を打つ[1]。十二時前、足が冷えるので毛布で足をくるむ。先ほどの喀血の際、咳のため喉に痛みを覚える。喀血の徴候は、あたかも呼吸が迫りくるようだと患者自ら云う。その後喀血なし。

午ごろ江間（馬の誤り）医師来診。曰く、「脈拍が依然として多く、この調子では喀血は継続する。しかし一時に一升や二升も喀血するわけではないので、生命には別条はない。ただ貧血のため病気の全快は長びくだろう。」と。

午後体温が上がり、氷嚢を代えること最も頻繁。大原恒徳氏[2]、続いて歌原誠氏[3]が来院する。さらに弁護士の桜井一久氏[4]が見舞いに来る。鳥居赫雄氏[5]が福本氏宛の書簡を持って来たので即刻返翰する。竹村氏が（職場から）帰って来た。付添いの看護婦を一名増すことにした（二十八日午後）。しかし聾の老婦人であったので夜に帰宅させる。その後二回血痰を見るのみ。夕暮れ、当直医来診。異変なし。九時、竹村氏大原氏帰る。体温は下がり、容態は良い様である。その後血痰を吐いたことは一度のみ。九時頃より体温が上昇する。十時前、脈拍八十四。十時すぎより気分が泥酔のようだと云う。その後、快眠が続いて四時前に至る。脈拍七十八。気分は良く、ちょうど酔いざめのようだと云う。体温三十七度一分。

1）竹村鍛の住所は神戸市中山手通七丁目番外屋敷十五だから神戸病院のごく近くで電報を打って呼び寄せるまでもないが、どこか遠方に出張でもしていたのだろうか。

2）大原恒徳は、子規の叔父。

3）歌原誠は子規の母八重の叔父にあたる。

4）桜井一久（1858－1910）。兵庫県出身。神戸の弁護士。日本新聞社員と親交があった。

5）鳥居素川（1867～1928）。本名は赫雄。明治・大正期の日本のジャーナリスト。日本新聞社などを経て1897年（明治30年）に大阪朝日新聞社に入社。後に編集局長に就任。明治28年当時は日本新聞社員であった。

五月二十九日　午前、当直医診察。同じく午前、牛乳五勺ずつ再度飲む 。十時江間(馬の誤り)医学士来診。曰く、「だいぶ状態が良い。薬が効きすぎたせいか血が早く止まり過ぎた。丸薬を二粒ほど減じて水薬を残り一回分の処方とする。」と。

午にお粥を少々と玉子を食べる。午後冷気を感じる。同じく午後一時二十五分頃、和泉医師[1]来診。同時に小包郵便が二個ほど到着。その一つは日本新聞からで、もう一つは宿元から衣類三枚。竹村氏とその妻が来る。午後三時ごろより少し発熱して、うとうとと眠る。五時過ぎに牛乳。七時、脈拍八十四。八時四十分ごろ浣腸。大便が出る。九時過ぎに高浜氏は竹村氏宅に帰る。一時十分頃より（虚子が）看護婦に替り看護する。二時頃まで呼吸少し苦しい。患者に聞くと何処となく苦しいと答える。十時頃カステラを少しを食べたが、そのために胃が心持ち痛むのだろうか、患者自身もその辺を疑っている。三時頃より快眠。

1）和泉は泉の誤り。泉虎雄。県立神戸病院の医員。

page 252）

五月三十日　九時ごろ西洋イチゴを食べたいと云う。イチゴを買って食べさせたところたいへん気に入る。曰く、「これほど美味いものはない」と。 江間（馬の誤り）医師来診。曰く、「大分状態は良い。喀血は殆んど止んだ。左肺の或る所までは呼吸音を聞き取れるが、それより左は全く呼吸音が聞こえない。明日から薬を変えましょう。」と。

井上藁村[1] 見舞いに来る。藁村氏の邸内に出来た夏橙 を贈られる。喜んで食う。二度ほど痰に交じった血を見たので、これを医師に示したところ、これは古い血であるから心配ないとのこと。その後、再び血痰を吐いたので、これを医師に示したところ、これは新しい血なので困るとのことであった。四時に喀血数度あり。体温上昇し、三十九度七分 位 。煩悶する。竹村氏見舞う。陸、福本両氏および河 東 へ手紙の返信。何処かわからないが苦しそうで 大 に煩悶する。布団をはぐ。夜九時、大原氏は竹村氏宅に行く。

九時過ぎに当直医の来診。曰く、「煩悶するのは熱が高いためだろう。十分に冷やすのが良い。別にどうこう騒ぐほどもない。」と。時々、咳を催してその度々喀血する。咳の薬を貰おうとして医者の後を追う。九時半ごろより漸 く眠りについたようだ。付添いの看護婦も寝かす。十時過ぎ、咳の薬を一包頓服する。この前後、熟睡続く。二時半、看護婦と付添い役を代る。これより 暁 まで異状なし。

1）井上藁村。本名は亀六。日本新聞の社員。

五月三十一日　朝体温三十七度五分。咳の薬一包頓服。時々血が出る。江間（馬の誤り）医師来診。曰く、「薬を今朝より代えるつもりだったが、前の通りの処方とする。会話は厳禁。」と。 都 新聞特派員の石戸谷昌之進[1] 来訪。依然として時々咳を発する。頓服、最後の一包を飲み干す。暑いと云って布団を剥ぐ。牛乳を勧めても飲まない。脈拍七十二。よく眠る。咳をする度に血痰が出る。医師に話したところ、曰く、すでに相当の薬を与えているから、外に兎や角する必要はないと。歌原氏より恵贈の「園の露」到着。今居医師[2]、再度（大坂から）見舞いにくる。咳は止まらない。時々痰に交じる喀血は依然と同様。熱もそれほど上がらず、苦しみも左程ではない。午後八時、咳に続いて頻りに喀血が続く。当直の医師を呼んだところ、薬は充分与えているから特に新たな治療は必要無い。その内、やや症状は治まるが、なお時々咳と喀血。この時喀血の量最も多い。患者自身曰く、「経過は良い。喀血のあとも左程苦しくない。」と。

1）石戸谷昌之進は都新聞の社員で、日清戦争の従軍記者。

2）今居医学士は、陸羯南の妻の兄で、大坂病院の眼科医長。（明治28年5月26日付　陸實（羯南）から子規宛ての書簡）（文献5

六月一日　夜二時五十分より看病婦に代る。 患者少し眠り、四時五十分ごろ目覚めたので、粉薬を飲ませる。睡眠中に時時喀血する。血痰が出る。

十時、江馬医師の来診[1]。曰く、「牛乳を飲まないのは困る」と。□□□度々血を見る。

1）ここではじめて江馬と正しく書く

六月二日　二時ごろよりやや眠りにつく。呼吸する度にのどが鳴って苦しむ。もっともこの症状は従前どおり。湯を求めて麦茶を飲むこと二度。

六月二日　朝まで異変なし。九時牛乳二瓶飲む。九時すぎ排便のため浣腸するが、排便の量は極めて少い。一匹の虫が出てきた。その後極めて平穏にて咳もなし。正午まで殆んど喀血は無いものの、正午頃二三度咳を発し、黒い血を吐く。その後は平穏。朝牛乳一合、昼八勺ぐらい飲む。今居医師、三度目の来診[1]。曰く、「今日は一昨日に比べて大いに良い」と。夕方また牛乳七・八勺を飲む。五時ごろより発熱して三十八度九分に至る。咳はない。喀血もなし。しかし熱が高くなったせいか呼吸が苦しそう。九時前 村井医師来診。曰く、

- 熱が上がる度に病巣の範囲が徐々に広がるものであって、これは致し方がない。喀血が止まってから十分な養生が必要である。
- 左肺は全く機能していないが、それでもなお正常な部分も残っている。病勢はこの部分へ段々に広がりつつある。
- 呼吸が苦しく思うのは、感覚が残っているからである。本当に衰弱すると所謂虚脱に陥り何も感じないものだ。
- 昨日に比べると脈拍も良く、総じて気力がしっかりしたようである。
- 左肺に氷嚢を当てた所の凍傷による疼痛がひどい。氷嚢をやめて、氷水に浸した木綿の布をあてがうことにした[2]。

三日（午）前二時半、この凍傷の箇所の苦痛が耐えがたく、当直医の診断を乞うたところ、曰く、「別段、致し方ないことであって、忍耐するのみ」と。三時過ぎより時々安眠できた。

1）今居医師は大坂病院の眼科医であるから、来診ではなく、神戸病院へ来訪ではないか。

2）医師より氷水で患部を冷やすことを命じられたが、子規の発案で、医師の指定よりずっと大量の氷を用い、しかも皮膚にガーゼを置かずに直接冷やしたものだから、患部を覆う皮膚が凍傷を起こす。これを見てある若い医師が、「こんなバカなことをすれば凍傷を起こすのは当然だ。いくらあせっても止まる時が来なけりゃ喀血は止まらない。血は出るだけ出して置けば止まる時に止まる。」という。これを聴いて子規は会心の笑みをもらす。この若い医師は小細工を

労する試みを嘲笑して余すところが無い。それ以後、子規は少しも病気に対して焦る様子をみせず、安心して寝た。（虚子「子規居士と余」）

六月三日　朝八時半、牛乳七勺を飲む。十時頃、子規は私（虚子）を寝台に近づけて鳴雪先生[1]（図7）に次の一句を送れと云う。

卯の花[2]の里を氷のやけど哉（子規）

また二句できたと云う。

露あかしいちこ畑の山かづら（子規）

もりあげてやまいうれしきいちご哉[3]（子規）

この俳句は、今朝、私（虚子）がイチゴ畑に行って、手で直にイチゴをもいできたことを話したことがきっかけである。今日は朝から気分が良いとみえて正午ごろも病室のことについて会話をした。三時頃、また熱が少しばかり出そうだと云う。三時過ぎに江馬医学士の来診。曰く、

一、別に変ったことはない。

二、氷で冷やさなかった分だけ、治療法の一部が欠けたことになったが、これも致し方がない。

三、凍傷を起こしたからといってそこに穴が開くようなことはない。

四、母が来る様子だから、その程度に手当をしておけば良いだろう。

1）内藤鳴雪。伊予松山藩の武士で、明治維新後は文部省の役人を務めた。俳人。自分より21歳も年下の子規を俳句の師匠とする。東京本郷の寄宿舎「常磐会」の舎監を長く務めた。常磐会では正岡子規、河東碧梧桐、竹村黄塔など多くの伊予松山出身の学生が青春を謳歌した。

2）卯の花は空木の花のこと。旧暦四月（卯月）に白い花を咲かせことからこの名がある。開花は五月中旬～六月頃。卯の花は初夏の季語。小学校唱歌「夏は来ぬ」（明治29年）（小山作之助作曲、佐々木信綱作詞）の歌詞「卯の花の匂う垣根に　時鳥早も来鳴きて　忍音もらす夏は来ぬ」に卯の花が初夏の季語であることが示されている。忍音とはその年初めてのホトトギスの鳴き声。卯年（ウサギ年）生まれの子規は卯の花に自分を重ねた。

3）虚子と碧梧桐は一日交替で、毎朝、笊を以てイチゴを摘みに行く。イチゴの数は笊に一杯、およそ50個ほどであった。子規は毎朝、これを全て食べたのだから凄い食欲である。虚子と碧梧桐によるイチゴ摘みの話は、子規の「くだもの」という随筆に詳しい（文献6）。

明治廿八年の五月の末から余は神戸病院に入院して居った。この時虚子が来てくれてその後碧梧桐も来てくれて看護の手は充分に届いたのであるが、余は非常な衰弱で一杯の牛乳も一杯のソップも飲む事が出来なんだ。そこで医者の許しを得て、少しばかりのいちごを食う事を許されて、毎朝こればかりは闕した事がなかった。それも町に売っておるいちごは古くていかぬというので、虚子と碧梧桐が毎朝一日がわりにいちご畑へ行て取て来てくれるのであった。余は病牀でそれを待ちながら二人が爪上りのいちご畑でいちごを摘つんでいる光景などを頻に目前に描いていた。やがて一籠のいちごは余の病牀に置かれるのであった。このいちごの事がいつまでも忘れられぬので余は東京の寓居に帰って来て後、庭の垣根に西洋いちごを植えて楽んでいた。（正岡子規　くだもの〕

六月四日　五時に子規の母堂と河東秉五郎到着（図6）。昨夜から熟睡できない。眠そうにしてウトウトするときは重い盤石の下に敷かれるようで（特に左方の身体が）非常に苦しく感じる時に喀血する。またウトウトする間、頻りに変な感じになり、半分坊主になったり、また左の肩は不用の物なので切って東京へ贈ってやろうなどと思い、その都度、非常に苦しい。上記は全て患者自身の言葉である。朝以来、時々咳・喀血する。一度ほど、粘い血の塊を吐く。一時四十分、江馬医師来診。

一、江馬医学士が来た時に喀血した。その色は黒色であった。医学士曰く、「出てくる血は肺に溜まった古い血である。咳はこの血を出す為めに発するのである。」と。患者曰く、「全くそのとおりだ。喀血するときでなければ咳は発しない。血が溜まるためだろうか、時々窒息する心持になり飛び上がる様なことがある。」と。

二、牛乳を飲むと咳を発して喀血するので、牛乳を飲まないようにしていると患者が言うと、医師曰く、「そうならば管か何かを使って牛乳を飲むのが良い」と。その後、特に変化もなくウトウトとしては目覚め、ときどき咳を発し血痰を吐く。六時ごろ、患者曰く、「今食べるとしたら何でも食べることができる」と。その時、咳を発して咽る。苦い牛乳はどうしても飲むことができないから、お粥を食べたいと云う。そこで看病婦にお粥を造らせることにした。体がたいへん冷えるというので、毛布を右胸部にかけて足に靴下をはかせる。夏橙、お粥を茶碗に半分、半熟玉子を食べる。十時ごろよりやや熱発の模様。熟睡する。しかし呼吸が苦しく、段々に緊迫してくるようである。揚句に咳を発して喀血する。十一時ごろ背骨あたりが痛いのだろうか、非常に苦しそうであったが、その後やや安眠した模様。睡眠中「アー」とか「ウー」とか唸る。このような低い唸り声が聞こえたが、十時ごろに比べると安眠の様子である。時々咳をするが、喀血は極めて少量であった。

六月五日　午前七時半。体温三十六度三分。朝以来、平穏かつ安眠の様子。昨朝に比較すると熱も下がり、気分も安らかである。昼に刺身を食ってみたいと云う。看病婦に買いに行かせる。刺身一皿、お粥二杯半食べる。イチゴをたくさん食べて、頗る壮快な面持ちである。曰く、「イチゴとり」とは中々おもしろい言葉である。小説にするならば森鴎外などが好む題材だろうか・・・。森鴎外に金州[1]で会ったことを話しただろうか？」と。私（虚子）は、「その話は未だ聞いていない」と答えた。すると患者は「金州の兵站部長は森鴎外であると聞いていたので訪問したところ、兵站部長ではなくて軍医部長だった。その後、毎日、森のもとを訪問した[2]。」と会話が続いたので、これでは体に障ると思ったが、折角の話の興をそぐのもどうかと思い、適当に返事をすることにしてできるだけ会話を避ける様にした。

江馬医学士来診。曰く、

一　大分よい。この上は精々会話を慎んでもらいたい。
二　薬を処方するから、砂糖水をコップに入れ、その中に十五滴を混ぜて三時間毎に一杯六度、都合十八時間内に飲みきること。今日は午後十一時まで服用して、それ以後は明朝から服用すること。
三　湿布で（患部を）冷やした時、水が零れて衣服や布団を濡らしたので取り替えて良いかと尋ねたところ、「決して取替えてはいけない。身体を動かすは頗る危険である。」と。「既に衣服は着替えている。着替えも危険である」と。

十時ごろより喀血なし。午後二時十分、一度だけ喀血があった。三時十分、小水あり。前日に比べてその色は清み、またその量は多量であった。その後、平穏であったが夜に入ると鼻血が出た。既に昼から少々は出ていたけれど、この時は、頻りに出て止まらない。当直医を呼んで診てもらったところ、曰く、「氷を口に含み、強いて血を出すことがないように」と。当直医の指示に従うことにしたところ、やがて鼻血は止まった。夜、熟睡。

1）金州は、中国遼東省の政治・経済の中心地。
2）鴎外は、明治28年5月4日と5月10日の2回、子規に会ったことを私的な記録「徂征日記」に書いているから、鴎外と子規が戦地の金州で出会ったことは事実であろう。

六月六日　明け方に近い頃から煩悶を覚えたと見えて、ときどき目を覚まして呻吟（苦しんで呻くこと）する。それでも熟睡が続いた方である。喀血は（以下空白、後で何か書き加える予定であったか？）。七時過ぎイチゴを食べる。十時過ぎより熟睡。呻吟の様子はない。十二時過ぎ小便あり。多量にして色澄む。浣腸したところ多量に便が出る。昼飯はお粥一ないし二サジほど、刺身半人前。夕方までほぼ安眠。夕飯にシチューを食べたいと云うので、看病婦にこれを頼む。咳はするが喀血はない。喀血が止まる徴候か？喀血することはあっても少量である。六時、シチューを少しだけ食べる。牛乳一合を飲む。また熟睡。夜はさほどの苦しみもない様子であったが、十二時ごろ左の患部が火が燃えるようだというので、氷嚢を高く吊り上げて、少しばかり冷気を患部に送る。およそ十分間隔で咳を少しして、その度に痰を吐く。痰に少量の血が交じる。二時、（虚子は）看病婦に代って寝る。七時に私（虚子）が目覚めたころ咳を催すことが頻繁であった。咳の度にでる血痰は昨夜に比べると多い。患者曰く、昨夜は非常に剣呑（危険であること）であったと。

六月七日　朝、イチゴを食べ、牛乳一合飲む。私の隣りに碧梧桐が居る。患者が発句[1]について議論せよと迫るので、それを断るのもいかがと思い、東京の（文学の）状況について多々話をしたところ大いに満足の様子であった。それも鳴雪翁からの葉書に「一時はどうなるかと案じておりましたが、今では作句を頂戴するほど体調が回復されて、私も甦った心地がします。**ほととぎす其一聲に夜明たり**（鳴雪）」とあるのを読み聞かせたからである。患者は、再び低い声で「吾々の仲間には発句を実際に応用し、これを上手に使う人がいないのは実に残念だ。月並者流の句を作ることは望んでないが、実用面から見るべき点が多い。昔の人の句を見ればおおよそわかりそうなものである。森川許六[2]が書生を送る際に　**本箱になるべき桐の若芽哉**　などの例があるだろう。つまらない句ではあるが、季語と事実の両者の関係がよく分かる。俗は俗であってもその運用の妙、いったい今の世の人の俳句の及ぶ処だろうか。私たち俳句仲間は古人の句をあまり読まない風潮があるが、私はもっともこれを恥とする。今後はなにぶんにも送別、留別、祝宴などの機会をとらえて適当な句を作ることを希む。」などと云う[3]。

昼前、泉医師の来診。曰く、「異変なし」と。昼牛乳一合を飲む。午前十一時ごろ二句できた。

杜若尼寺あれて人もなし（子規）

これは私（碧梧桐）が、今朝、慰みにもならないかと思って花菖蒲を二三枝花瓶に挿したのを見たためである。

涼しさや吾ねる上に牛の面（子規）

終りの五字の意味は何だか解らない。夕飯にはお粥一杯余りと刺身一皿を食う。私（碧梧桐）が夕飯のおかずは何が良いかと問うと、患者曰く、「何でも食べるが、思い付かないのでいつもの刺身にしよう。洋食ならばキャベツ巻などが良い。」と。この朝、九時大原恒徳氏、伊予松山に帰国。十二時高浜虚子は中兄の招きにより大坂に行く。五時過ぎより頭を冷やす。同時に便通あり。夜になると竹村と種々談話する。その間、患部を示して、この夜はいつものように痛まず、何だかムクムクするような感じであると云う。夜が更け、ことさらに平穏である。喀血少し。

1）発句とは和歌や漢詩の第一句。たとえば和歌であれば五七五七七の最初の五の句。連歌や連句の巻頭であれば、第一句の五七五の十七音から成る。発句は一般的には上席（高位，長老）が詠む。
2）森川許六　江戸時代前期から中期の俳人。狩野派の絵画でも有名。芭蕉に入門し、門人となる。芭蕉は許六に俳諧を教え、許六は芭蕉に絵を教えた。彦根藩の藩士。
3）月並とは、月に一回の定例会のことである。例えば俳句であれば、月並句会とは、俳諧の師匠があらかじめ弟子らに題材を示し、月1回の頻度で開催される句会の当日、出席者から句を集めて、これを評価する。このような月並句会で高い評価を得る俳句は、花鳥風月を愛でたり、機知にたけた句であることが多いが子規はこれらの句を月並調として排撃した。ここから月並という言葉が、本来の語義から「陳腐、ありきたり、平凡」という否定的な意味に転じていった。このように月並流の俳句を嫌った子規ではあるが、季語を用いることなど月並者流の俳句に見るべき点があること、月並流を含めて古人の俳句を学ぶ姿勢がない門人に苦言を呈することなど、月並流を評価している俳論を展開している点で興味深い。

六月八日　雨 昼後晴れ。朝牛乳一合。大風大雨のためイチゴ取りに行くことができない。残念である。朝九時ごろ、三十六度半。十時四十分江馬医師来診。曰く、「大分

状態がよいから、今までの粉薬を止めて、今日から二種類の丸薬にする」など云々。昼飯にオムレツ少しばかり、鰻一切れを食べる。三時すぎ体温三十七度二分。昼食後、枇杷およびイチゴを食べる。五時前に牛乳一合。夜、平穏。

六月九日　朝体温三十六度一分。朝牛乳一合とイチゴ。昼同じく、粥を半椀、刺身半皿。昼前、太田正躬[1]氏来訪。二時半、泉医師の来診。三時一句あり。

時鳥命捨てんとする女あり（子規）

パイナップル缶を開けてこれを食べる。六時、牛乳五勺を飲む。今朝、太田正躬氏が来訪した時、会話した為だろうか、昨日までよりは、少し余計に血が出たと云う。頻繁に咳をする。夜、熟睡。咳も少なく血痰を見ることも極めて少ない。

1）太田正躬は、子供の時以来の子規の友人で、当時、会社員として大阪に住んでいた。正岡子規、太田正躬、三並良、森知之、竹村鍛（黄塔）の五人を子規は「五友」と称し特に親密にしていた。

六月十日　朝、牛乳五勺。体温三十六度一分。咳を何度もするが、一筋の血も出ない。正午、鯰鍋一人前を食いつくす。今日より毎日一鍋を食うことに決めたと患者が云う。気分は爽快。虚子等の生き方に注意を与え、森鴎外、小杉天外、幸田露伴、夏目漱石等について議論する。その他雑談したり、新刊書についての批評をする。五時半、牛乳一合飲む。この間、夏橙を一箇半も食べる。夜になると頭痛がしてので、明朝、浣腸して貰えないかと云う。十時過ぎより氷にて頭を冷やす。夜、どうしても寝具の具合が悪くて、眠ろうにも背中が痛くて眠れないから、掛け布団を敷き布団の下に敷いてくれと云う。少し待ってくださいと云ったところ、辛抱できないと強く望むので、これを無下に否定もできない。そこで体を左に寄せて、掛け布団を半分に折ってこれを敷き込んだのであるが、十分に真ん中に入らなかったので左側が低く右側は高くなり、たいへん不格好な寝床ができた。その後、枕を高くしてくれというので、数回、頭を動かしたところ患者は大いにその苦痛を訴えた。

六月十一日　朝、霧深く不快な天候である。体温三十六度八分。朝牛乳一合。昼五勺余り、及び鯰鍋。江馬医学士来診。曰く、「パンかお粥を食べなさい。痰が完全に白くなって血が交じらなくなっても、その後一週間ほど動いてはならない。今日も体を動かすことのないよう注意しなさい。」など云々。午後、体温三十八度二分となる。しかし別に苦しむ様子なし。夜、竹村鍛氏が来て、彫刻などについて議論する。夜、快眠。咳をすること極めてまれ。

六月十二日　大久保慎二[1]氏来訪。浣腸。梨の缶詰を開けたが、口に合わない。杏と枇杷を食べる。二時、泉医師来診。同刻、お粥少しを奈良漬にて食べる。それも口に合わないというのでジャムおよびパンを買ってきたが、少しばかり食べただけ。夜、平穏に過ぎる。

1）日清戦争に従軍した大阪毎日新聞記者。

六月十三日　今朝、虚子、国へ帰る。ジャムを湯にとかして少しばかり飲む。朝以来、安眠多し。十時過ぎ牛乳五勺余りを飲用する。昨日よりイチゴをやめた。「胃に悪い心地がするのは果物を食べ過ぎたためで、今日は余り食べないようにする。」と患者自ら言う。夕方、昨日のパンの残り（今日、買いに行くのが遅く、店頭に既に無し）とジャムを快食する。三時、江馬医師来診。薬の処方を変更する話があった。また日を追って横臥することを習いなさいと言われた。夕方、竹村鍛および碧梧桐等と快談する。夜、安眠。

六月十四日　朝牛乳一合。この日、浣腸せずして□□あり。昼過ぎまで談話する。刺身一皿とお粥を食べる。夕方、パンとジャム、玉子のフワフワを食べる。今日は少し食が進むという。夜、安眠。この夕、発句、数首を作る。

六月十五日　朝以来、胃が悪いと云って牛乳を飲まず、杏と枇杷を少し食べたのみ。体温三十六度。十一時過ぎ、江馬医学士来診。曰く、「寝床の具合が悪いようなので、隣りの寝台へ一時移って之を直しなさい。」と。江馬医学士が去った後、泥鰌鍋を半分ほど食べる。午後四時前より大いに胃の調子が良くなり、何か御馳走を食べたいというので急にお粥を焚き、鯛の吸物を作らせる。お粥一杯半、鯛の吸物二人前、および泥鰌鍋の残りを快食する。曰く、「うまし、うまし」と。夜、安眠。夕方、竹村と談話。この日髭を切る。

六月十六日　朝牛乳一合。十時泉氏来診の前、東京の鳴雪老人に送る手紙一通書く[1]。昼、お粥一杯。泥鰌鍋と鯛の吸物を快食する。パン及びジャムを間食する。夕方お粥半分、泥鰌鍋の残り、吸物などを食べる。夕方、風邪をひいたのかクシャミを二三度する。夜更けに咳を頻りにする。痰はあまり出ない。

1）子規全集第18巻書簡1には、鳴雪翁宛の6月16日発信の書簡は無い。

六月十七日　朝、風邪の症状はないが、背中の具合が苦しいという。たぶん大便が詰まっているせいで、「さし入」をいれて排便を促す。少しだけ便が出た。昼、昨日同様にお粥一杯、泥鰌鍋、鯛の吸物を食べる。今までの寝台の具合が悪いので、これを他の寝台に替えるために患者の体を担ごうとしたところ、一人で立ってみたいと云う。ほとんど立ちかけたが、足に力がなくて立つことができない。結局、皆で（子規を）寝台ごと担いで病室のスミに寄せ、新しい寝台に移った。今までは南枕であったが、窓が背中向

きの方向なので、東枕に変えたところ、患者より看病人にとって清涼感があった。夕方、昼食の残りの汁鍋などを食べる。その前に焼いたパンを少し食べる。四時過ぎ、碧梧桐と大いに義太夫のことについて議論する。夕飯はまずい。又々胃がよくないと云う。夜、安眠。

六月十九日　朝、枇杷を食べる。便通なし。昼、鍋と吸物を食べる。夕、汁に玉子を潰したものを食べる。昼すぎ、豊嶋昌義[1]氏が松山へ帰る途中に来訪する。夜、碧梧桐が謡を一番うたい、気分が良いというが、十二時過ぎごろまで眠ることができず、大いに閉口する。この日、東京根岸の借家の件について東京へ電報をうつ。

1）松山の旧友

六月二十日　朝、内藤翁より手紙[1]が来る。発句があった。枇杷百匁（もんめ）を食べきる。しきりに発句を作り、その数は四・五十にも及ぶ。昼粥二杯、吸物、鍋を快食する。近頃ないほどおいしいと云う。昼前、豊嶋氏来訪。昼後、泉医師の許可を得て、布団で支えて半身を起こし、およそ一時間ほどその姿勢を保つ。患者は大いに得意げな様子。その間、アイスクリーム一つ食べる。夕飯の時、また体を起こし、お粥一杯、刺身一皿、滋養豆腐を少し、パン少し、玉子のフワフアを少しばかり食べる。夜に入ってもなお数句を拾う[2]。あまりに精神を労したせいか、一晩中眠ることができず、大いに困窮する。

1）明治28年6月18日、鳴雪翁はだいたいこんな内容の手紙を子規に送っている。子規は死を免れないとあきらめていたので、回復を心から喜んでいる。原文は文語体なので現代語訳を試みた。

神戸市県立神戸病院入院患者　正岡常規様

東京の花菖蒲一片を入れました。ご覧ください。
貴殿の手紙ありがたく拝見しました。今ですから言いますが、一時はあなたの手紙を二度と受け取ることはないのではと思ってました。天の幸せともいうべきでしょうか、こうしてあなたの手紙を受け取り、手を打って喜びました。しかし「勝って甲の緒を締めよ」と申しますので、ここはなお一入（ひとしお）ご用心ください。近い将来、東京にご凱旋のことと思います。しかし東京は病後の養生の場所としては適当ではありませんから、しばらくの間、須磨の辺りに逗留するのどうだろうか、などと陸氏と話しておるところです。何にしても（ご快癒は）めでたいことです。留守中、令妹（律）は御無事で、何の御心配をすることは及びません。（以下略）
六月十八日　鳴雪

2）「句を拾う」とは作句すること。

六月廿一日　朝、ほんの短い時間であるが眠る。昼、いつものように鍋、吸物などを快食する。体を起こして食べる。夕飯前、パンを二切ればかり焼いて食べたせいか、夕飯がうまくないと云い、少し箸をつけただけ。日暮に大坂の今居氏来訪。竹村氏、同時に来訪。宿直医来診。潅腸すると安眠できないので十時前に潅腸する。大便が少しばかり出た。夜は心置きなく安眠したとはいえないが、それでも少しは眠ることができた。

六月廿二日　朝、枇杷（びわ）を食べる。昼、ふとんにもたれてお粥、鍋、吸物などを快食する。松山の夏目（漱石）氏及び東京の令妹（律）に送る手紙を書く[1]。十一時過ぎ江馬氏来診、大いに野菜を勧める。そこで急に白菜、白豌豆（えんどう）などを買いに行かせる。戻ってきてから、夕飯にこれを料理させたが、からすぎたり、甘すぎたりして、全てが患者の気に入らない。しかしお粥一杯、鍋の残り、吸物などを食べる。夜比較的に多く咳をする。眠っているようでもあり、目覚めているようでもある。眼はいつも開けていて、頭が冴えているという。

1）講談社版子規全集第18巻書簡1には、該当する手紙は無かった。

六月廿三日　朝、少しばかり安眠する。九時、泉医師来診。つづいて仙田重邦[1]氏、大坂より来訪。少し会話して帰る。昼、いつものように快食。その後、発句数句を拾う。夕飯前の六時前、体温三十八度二分に上り、一時、呼吸せわしく、心臓の鼓動も激しく、苦しそうな様子であった。しかし暫時（ざんじ）にして鼓動も止んだものの、体温は依然として下がらない。八時前、心臓を冷やしてみることを医師に提案したところ、医師が来て患者を診たときは既に平常に戻っていた。医師は冷やす必要ないと云う。そこで体を起こして、お粥を二杯、今日料理したおかず、それから茄子の奈良漬、大いに気に入り快食する。看病人は皆、やっと愁眉（しゅうび）を開いた。夜、安眠というわけではないが、まずまず睡眠がとれた方である。

1）仙田重邦は日本新聞社の発行する「小日本」の経理・営業担当者。
2）「愁眉を開く」とは、心配や不安がなくなり安心するさま。

六月廿四日　朝、体温三十六度八分。お粥二杯、玉子のフワフワ、奈良漬などを快食する。これを朝飯の最初とする。昼、粥三杯、鍋、吸物その他蚕豆（そらまめ）の煮たもの、野菜の煮つけ、奈良漬など五味八珍（ごみはちちん）[1]を並べて快食する。夕またお粥二杯。その他同じ。夜、安眠は得られないものの、全く眠らなかったわけではない。

1）五味とは五種の基本味のこと、八珍とは八種類の豪勢な料理のこと。

六月二十五日　朝、体温三十七度二分。少し苦しいと云って朝飯を食べない。昼、お粥二杯その他、昨日と同様。江馬医師、昼前に回診する。夜、不眠を伝えると頓服を処方される。昼すぎ、少しの間安眠し気分が好転し、陸氏へ送る長い手紙を書く。夜、頓服の為に安眠できたが、咳が頻りに出る。

六月廿六日　朝、体温三十六度七分。昼、昨日と同じく、お粥二杯、吸物、鍋などを食べる。昼、岡崎・高原氏来訪する。夕飯前、竹村氏また来訪。夕飯は茶椀蒸しを命じてお粥三杯たべる。夜、だいたい安眠。

六月二十七日　朝以来、大いに検温器についてやかましいことを云う。つまり番号182の検温器は表示目盛から六分ほど減らすことに定めた。昼、夕、ともに快食。昼飯は今日から毎日、料理屋に一品ずつ注文することにした。夕方また刺身をこしらえた。珍本全集の上巻[1]を買う。夜安眠の様子。

1）博文館編輯局 校訂「珍本全集 上巻」博文館 1895年（明治28年）。懐硯（ふところすずり）5巻（井原西鶴）他。江戸時代に発行された奇譚、人情本。子規は明治28年に刊行されたばかりの新刊を購入した。

六月廿八日　朝、手紙一通を書く。左脇が妙に痙攣する。看護夫（婦？）に野菜を買いに行かせる。昼、料理屋から届けられた魚の子の料理が気に入り、お粥三杯お替りしたことを覚えず、四杯目にやっと気付き驚いた様子。中山安太[1]、菅沼政典[2]氏等来訪。中山氏は九州に帰る途中、三津へ立ち寄るとのことであったので[3]、急遽、母堂を連れて行ってもらうことにし、五時、母堂は出発された。夕飯はあまり食が進まないが、箸をとる。豆、野菜の煮つけ、吸物、昼の鍋、及び魚の子の残りなど処（ところ）狭きまで並べた。夜、排便しかけたが、遂に出ない。夜、安眠とはいえないが、少しばかし寝た。

1）中山安太は日本新聞の社員。

2）菅沼政典は松山中学卒業のジャーナリストで兵神日報社員。松山中学は多くのジャーナリストを輩出している。（三好恭治の歴史エッセイ「熟多津今昔」第九章　松山中学校と慶応義塾～初代校長・草間時福～）

3）当時、愛媛県の三津浜港と神戸港の間に船便があったので、これを利用したのではないだろうか。明治16年6月10日、子規は初上京の旅で三津浜港から乗船し、翌日、神戸着。

六月廿九日　伊藤鼎[1]氏、松山に帰る途中、訪問。泉医師、十時ごろ回診。昼および夕ともに粥二杯、その他の野菜も快食する。日暮れてしばらくたったとき、今日ほど心もちよき日はないと。思うに日中起きていた方がかえって気持ちが良く、寝た方が不快であると。また物に寄りかかって独りで起立することができた。

1）伊藤鼎は松山の先輩。

六月卅日　朝、検温したところ三十六度であったが、その後、体温が高まる様である。昼、快食。昼後、足と手の周囲を計測する。下腿の周囲[1]は七寸三分五厘、上腕の周囲は四寸九分。泉氏来診。曰く喀血の当時、左肺には空気の流通が無く、今日は漸くこの空気の流通を認めることができたが、十分とはいえない云々。夕飯、快食。きょう蕎麦粕（そばかす）を買いに行って枕を作った。夜ふけるまで眠ることができなかった。

1）下腿の最も太いところの周囲長を下腿周囲長 calf circumference（CC）、利き腕でない上腕中央の周囲長を上腕周囲長 arm circumference（AC）という。これらの身体計測の目的は、貯蔵エネルギー量を示す体脂肪量と体タンパクならびに身体機能の能力を示す筋肉量を概算し、身体の栄養状態を推定することである。医療現場では、ことに高齢者の低栄養や筋肉量の評価に重要である。子規の下腿周囲長七寸三分五厘は、7.35寸（分は1寸の1/10；厘は1寸の1/100）。また1寸は1 mの1/33であるから子規の下腿周囲長は22.3 cmである。同様に上腕周囲長は14.8 cmとなる。下腿周囲長が28cm以下、上腕周囲長を21 cm以下をサルコペニア（筋減弱症）と定義するから、子規はサルコペニアと診断できる。

七月一日　朝になってやっと眠る。昼、夕ともに快食。夜が更けてから目覚めて、それから眠れない。朝になってやっと眠る。この日より物に寄りかからずに腰をかけて自ら体を支えることができるようになった。まだ確として動揺せずに立（たち）つことはできない。たぶん体の中心を保つことができないからである。

七月二日　朝、大風、細雨（ささめあめ）、寒い。潅腸せずに排便あり。昼夕ともに快食する。江馬医師来診。曰く、「丸薬を十四個に増加する。朝、食べると大いに胃を損なうが、何も食べないと服薬上不都合なので、何かしらを食べてもらう」と。腹部の垢を落とす。夜、ほどほどに眠る。十一頃、咳多し。パイナップル、バナナ、桃、枇杷などを食べる。

七月三日　朝、お粥一杯半。昼、快食。昨日より初めてオマルに跨がり大便する。大いに具合がよくて気分が良い。今日もかなり便が出た。夕飯、快食する。大食（だいしょく）であった。夜二度小便あり。安眠。

七月四日　昼、夕共に快食する。昨日の大食（おおぐ）いのせいか、今日は腹具合が悪いという。夜一度も目覚めることなく安眠する。

七月五日　朝、また手足の周りを計る。下腿 七寸六分、上腕 五寸[1]。十一時前、病室を替わってほしいと云われ、それならば別格の病室に変わろうと自ら歩んで玄関上の病室に移動する。入院して初めて歩くことなので危ぶんだが、碧梧桐の肩にすがり、とくに疲労もせずに三十間[2]ばかりを休憩することなしに歩行した。昼、快食。この日、鼠骨[3]が京都より来たので、子規に紹介する。夜、日中の種々のことのためだろうか、安眠できない。終日、胃が悪いといって食が進まない。

1）下腿周囲長23.6 cm、上腕周囲長15.2 cmであるから、依然として状態はサロペディアである。しかし、1週間前の計測値に比べて、下腿周囲長は7.7 cm、上腿周囲長は0.4 cmの増であり、体調が好転したことは筋肉量からも推測できる。

2）1間（けん）はおよそ1.8 mだから、30間は54 m。

3）寒川鼠骨。松山中学校で高浜虚子の1年下、河東碧梧桐の2年下。1893年に第三高等中学校（京都）に進学し、虚子、碧梧桐と同じ下宿に住んだ。子規を見舞いに来た1895年（明治28年）に三高を退学して京都日の出新聞の記者になる。後に子規の紹介により日本新聞社に記者として入社する。子規の死後、子規庵や遺稿の保存などに尽した。

七月六日　朝、看病夫がランプの油を床にこぼし、その匂いに我慢ができず閉口した。午時、御母堂と高浜虚子が来着する。胃が悪く、快眠できない。

七月七日　異状なし。午前、虚子と句談を試みる。夏橙、桃等を快食した。

七月八日　朝、何処となく苦しく元気がないと云う。**二三日来、胃を害した為めに不快を感じること多い。今夕、やや快。食後、始めて病床日誌を見る。覚えず笑壺に入る[1]。患者自記。**

1）「笑壺に入る」とは思い通りになって大いに喜ぶこと。「はいる」とは読まず、「いる」と読む。5月23日に神戸病院に入院した子規は、この日はじめて虚子の「病床日誌」に気付き、これを読む。子規が日誌を黙読しているとき、虚子や碧梧桐は、叱られるのではないかとビクビクしていた。しかし子規は文章が甘いとも拙いとも何も言わなかったので安心した。子規は読後、朱を入れたぐらいだからまんざらでもなかったのあろう。

七月九日　母堂と碧梧桐の二人は帰京する[1]。朝以来、不愉快と云う。痰中に一点の血を見る。杖を使わずに病室を一周する。患者は大いに得意気である。しかし二周目になると最早できないと云う。虚子と小説を談じる。朝日新聞社員川鍋、五十崎[2]両氏来訪する。1時間ほど快談する。病室を三周することができた。夜、竹村鍛氏が来て談じる。

1）子規の体調がかなり戻ったため、不寝番は不用となり母八重と碧梧桐は東京に戻る。

2）川鍋とあるが、川辺貞太郎ではないだろうか。川辺貞太郎は日本新聞ついで朝日新聞の記者。五十崎氏については不明。愛媛県出身で松山中学を中退した俳人五十崎古郷（本名修）と思ったが、明治29年生まれなので時代的に合わない。五十崎古郷の縁者か？

七月十日　雨。終日多くは椅子にこしかける。俳句 小説義太夫などを論じる。竹村氏来談する。夜寐つきよし。

七月十一日　風。別に変わったことなし。黙阿弥[1]の脚本、柵草紙[2]などを読む。

1）河竹黙阿弥。幕末から明治にかけて活躍した歌舞伎作者。

2）しがらみ草子は森鴎外が1889年（明治22年）に創刊した文芸雑誌。1894年（明治27年）廃刊。

七月十二日　前日と異ならない。

七月十三日　異状なし。下腿の周囲は七寸四分、上腕の周囲は四寸九分[1]。

1）下腿周囲長は22.4 cm、上腕周囲長は14.8 cmで、依然としてサルコペディア。しかし、7月5日に比較すると下腿周囲長は1.2 cm、上腕周囲長は0.4 cmほど増である。（がんばれ、子規！）

七月十四日　この日、埋木[1]を読了する。午後、理髪。涼みにて涼みすぎたのか、少し熱発する。五夏（十）崎[2]、谷川氏来訪し俳談あり。

1）埋木は北村季吟が著した江戸前期の俳諧論書。延宝元年（1673）刊。あるいは森鴎外の評論「埋れ木」とことか。なお埋もれ木とは、火山活動や地殻変動により土中深く埋まった樹木が、長い年限を経て炭化したもの。燃料や工芸品になる。また世の中に忘れられた存在をたとえて埋もれ木という。

2）五夏崎は五十崎の誤りと思われる。7月9日参照。

七月十五日～同十八日　別事なし。雨が降り続いたので庭前を散歩したいという希望を、（体に障るからといって）無下に禁止して良いものかと感じた。

七月十九日　雨。澤村、岡崎両氏訪問。

七月二十日　晴。七時半、（子規は突然虚子の）下宿を訪れ、睡眠中の私（虚子）を驚かす。少しばかり休憩して下山手通より病院ノ本門を回って病室に戻る。呼吸やや苦しいと云う　（自筆稿　明治28年）

◆　◆　◆　◆

以上が、正岡子規の病症日誌の内容である。今まで、県立神戸病院入院中の子規については、子規を看病した虚子の「子規居士と余」などを通じて断片的に知られているが、この病床日誌を読むと子規が絶対安静から散歩ができるまでの過程がよく分かる。もし、子規のカルテが発見されたならば、さらに詳しい病状が明らかになるだろう。

明治28年7月23日、子規は神戸病院を退院して須磨保養院に向かう。病院を出て停車場に向かう途中、子規はつばのないヘルメット型の帽子を買う。髭を蓄え、病後のやつれた顔にヘルメット型の帽子をかぶった子規の風采は、今までと全く異なる印象を虚子に与える[2]。この停車場とは東海道線の終着駅であった神戸駅か山陽鉄道（現在のJR山陽本線）の兵庫駅のどちらかだと思うが、山陽鉄道は明治22年9月に兵庫駅から神戸駅まで延長されて神戸駅と連結するから、停車場とは神戸駅のことだろう。そして、おそらく山陽鉄道須磨駅（現在のJR須磨駅）で下車し、そこから人力車で須磨保養院に向かったのではないか。須磨浦公園内の須磨保養院跡地に最も近い駅は山陽電車の須磨浦公園駅であるが、山陽電車の前身の山陽電気軌道は当時はない。

退院した子規は、須磨保養院で病魔の手を逃れ、回生の喜びに浸る。そして故郷の伊予松山に戻り、漱石の下宿の階下に陣取って、毎日、句会を催す。しかし本当の病の苦しみが、その数か月後に始まるとは子規が知る由もなかった。

【文献】

1）正岡子規著「病」　ホトトギス 第三巻第三号　明治32・12・10

2）高浜虚子著「子規居士と余」岩波文庫 回想子規・漱石所収 pp.

5-105. 2002 年

3）高浜虚子他著「病症日誌」子規全集　講談社　第 14 巻 評論・日記 pp. 357-400, 1976 年 1 月 .

4）文献 3 の自筆稿は国立国会図書館デジタル化資料（正岡子規）病症日誌（1）として公開されている。http://www.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2546234?tocOpened=1

5）講談社版 子規全集　別巻一　子規宛ての書簡 1977

6）正岡子規著「くだもの」 ホトトギス　第四巻第七号　明治 34・4・25

（平成 27 年 2 月 15 日記）

■未発表原稿